

## 今堀宏三\*：第2回藻類学国際シンポジウムに参加して(2)

Kozo IMAHORI\*: Second International Symposium in Phycology held  
by University of Madras, India (2)

## シンポジウムも終り近く

シンポジウムのプログラムの前半を終えたところからプログラムの中の講演取消しがめだちはじめ、聴衆も心もち少なくなってきたようである。いわゆる大物の講演があらかたすんだせい、旅のつかれがぼつぼつ出はじめてきたためだろうか。それとも土地の地理も覚えて土産物買いや、観光にエスケープする者がふえたせいだろうか。私自身もできればエスケープしてタジマハールだけは見に行こうかとも考えていたが、あいにくの瀬木さんの入院さわぎでそれどころではなくなってしまった。かといってシンポジウムの方も出たり入ったりであまり落着いて聞くことができなかったが、とにかく今少し私の日記をつづけることにしよう。

第5日(金)の朝、瀬木教授を見舞ったが症状はさらにはげしいようで、たびたび嘔吐を催すということである。聞くと生水をたびたび飲用していたということで、おそらくそのために胃腸障害をひきおこしたのではあるまいかと思われた。筆者はかねてインドでは生水は一切だめだと聞いていたので、220 V 用の湯沸かしを持参しホテルで出された水も、もう一度煮沸するという用心をしたのである。この日の講演は不参加者の続出で、午前中の8講演のうち2講演のみを11時からはじめ12時で終るという有様で、終りに近くなってシンポジウムもいささかだれ気味である。この日は、ランソウ類の分類が主体である。その中で TALPASAYI, E. R. S. による Taxonomic relations in algae as viewed by enzyme activities と題するものは皆の興味をひいた。クロマトグラフィ、電気泳動、血清法あるいは核酸による分析などによってランソウ類の分類を再検討しようとするもので、研究そのものはまだようやく緒についたばかりのようであったものの、グリコーゲン代謝に関係する enzymes の活性で分類したデータを示した。このほか、フィコビルリンについて血清学的方法やアミノ酸組成などのデータからも分類に適用の可能性を示した。午後の講演が始まってしばらくすると、瀬木教授入院ということで又よび出された。大学の車でホテルに向い、救急車に瀬木教授を移し、ホテルのフロントにとりあえずチップを与えてのち、救急車に同乗して聖イザベラ病院に向った。病院につくと大学の車で先に到着していた DESIKACHARY 教授と秘書が入院手続を

\* 大阪大学教養部生物学教室 (560 豊中市待兼山町1-1)

Department of Biology, College of General Education, Osaka University, Osaka, 560 Japan.

Bull. Jap. Soc. Phycol., 23: 79-80, June 1975.

してくれていた。病院はカソリック系で、日本の病院よりもむしろ清潔であり、病室にトイレ、浴場などもドアをへだてて付属させ、エアコンディショナーのはいった満足すべきのものであった。夕刻まで荷物の整理や、瀬木教授の御自宅への連絡事項など打合せて、5時半に大学へ帰ったら、講演は丁度終了したところであった。

第6日(土)最終日である。いわゆる大物の講演はなく、IRVINE による Rhodymeniaceae の分類学的研究を除き、インドおよび東南アジア(フィリッピン、タイ、マレーシア)系の人たちによるものであった。発音のなまりがひどく、米語を聴きなれていて私にとって、とても理解し難いものが多かった。しかし、シンポジウムの最後に立ったタイの女性学者 LEWMANOMONT, K. はアメリカ留学をしていたせいもあり、美しい発音とカラーフィルムで聴衆をひきつけた。内容はタイのウミウチワ属の紹介で、600以上を上る標本から8種を確認したこと。またタイ新産種として、日本になじみの深い *Padina minor*, *P. japonica* および *P. distromatica* の3種をあげて、シンポジウムの講演はすべて終了となった。

月曜日以来の講演もこの日で終ったが、連日の講演のほか、月曜日と水曜日は夕刻から公開講演、火曜日はレセプション、金曜日はインドの芸術祭の見学、そして土曜日は大学生によるインド音楽の演奏会が、いずれも講演終了後行なわれた。こうした次第で、連日帰るのは8時~10時がほとんどという忙しさで、いささかの疲労を覚えた。

第7日(日)はエクスカーションである。マドラス郊外に散在する寺院群を訪れた。いずれも7世紀ごろに自然石をもって建造された建物、あるいは見事な彫刻や色彩鮮やかな石造建造物である。当時のインド文明のすばらしさに、とくに歴史と伝説に弱い米人たちは wonderful をくり返していた。日もとっぷり暮れてから帰途につき、ホテル前で別れを惜しみつつ一週間にわたるシンポジウムの幕は下りたのである。

### おわりに

Convener の DESIKACHARY 教授は有名な故 IYENGAR 博士の一の愛弟子であり、マドラス大学の藻類学の伝統をひきついでいる人である。写真(本誌, 23: p. 40)をみても察せられるように学者としてのきびしさの中に人間味も豊かな人物で、今回のシンポジウムは実質的には彼一人によって支えられたといつてよい。若いインドの藻類学者たちは、よく DESIKACHARY 教授の努力にこたえ、シンポジウムをもち立てるのに懸命であった。コーヒープレークや昼食は期間を通じて参会者一同が同じ室で話しあいながら飲みかつ食べたのであるが、こうしたときにもさきへのべたようにインド人どうしが固まってヒンズー語で話すようなことは全くなく、常に外国人グループの中に分れて加わり、交流を深めるとともに自らの知識吸収にせいっぱいの努力を傾けていた。こうした雰囲気はシンポジウムの成功の原動力の一つとなったことは否定できない。われわれが国際会議を催すときなどにあたり大いに学ぶべきことであると思う。